

23 幸福の青い鳥 永井均

■凡例 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。
3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■追跡——意味段落の切れ目を見定めながら

① ●幸福の青い鳥を探す長い旅から帰ったとき、チルチルとミチルは、もともと家にいた鳥が青いことに気づく。チルチルとミチルの以後の人生は、その鳥がもともと青かったという前提のもとで展開していくことだろう。それは、彼らにとって間違いなく幸福なことだ。自分の生を最初から肯定できるということが、すべての真の幸福の根拠だからだ。だからわれわれは、そういう物語を、つまり◆1『青い鳥』を、いつも追いつめていく。

▽筆者の問題意識、問題提起を探そうという意識で読み始めよう。

「青い鳥」の話を知らなかった人は、挿入されているコラムのあらすじを必ず読むこと。青い鳥というのは、「幸福を授けてくれるもの」。私たちが、それがどこかにあると思つて、いろいろなところにそれを探し求めて生きている。いい大学へ行けば、その先にあるのではないか、いい仕事に就けば、その先にあるのではないか、いい人に巡り会ったら幸福になれるのではないか…。「青い鳥」の話は、しかし、それはもともと「ここ」にあった、ということに気づく、という寓話になっている。「ここに あることに気づく」とは、「自分の生を最初から肯定することからしか幸福は得られないと気づく、ということだ。こんな家に生まれなければよかったのに、こんな容姿に生まれなければよかったのに…などと自分を否定し、別の可能性がどこかにあるのではないかと考えてさまよい歩きつづけているうちは、幸福は訪れない。「青い鳥」のお話を積極的な意味で受け取るなら、このようになるだろう。

◆問1 「青い鳥」とはどのようなものか。

比喩+指示内容問題。青い鳥Ⅱ「そういう物語」。われわれは何を求めているのか。↓「自分の生を最初から肯定できるということ」。ここが答えだが、文末を「物語」に変えておくこと。少し言い回しを変えて。

「解答例」 「自分の生を肯定してくれる物語。」

●だが、この物語は、同時に、それとは別のことも教えてくれる。つまり、——その

鳥はほんとうにもともと青かったのだろうか？ それは歴史の偽造ではないか？ 彼らはいま、鳥がもともと青かったという前提のもとで生きている。過去のさまざまな思い出、現在のさまざまな出来事は、その観点のもとで理解されるだろう。そして逆に、その理解が、鳥がもともと青かったという事実のもつ真の意味を、つまり真の幸福とは何であるかを、いっそう明確に定義することになるだろう。このとき、彼らは解釈的な生を生きているのである。

▽筆者のいいたいことは、先の前半部分にあるのではない。この「だが」以降にある。筆者がほしいことの中心は何か。ここは、問題提起の部分である。

「本当に鳥はもともと青かったのか」Ⅱ「本当に彼らの生は肯定されるべきものなのか」。

自分の生は肯定されるべきものだ、という前提をしつかり持つことのできたあの兄妹は、もう、こんな家に生まれなければよかったのに、とは思わない。もし、かつてそう思つて苦しんでいた過去があったとしても、もはや、それは違った輝きをもつて見られるようになっていく。ものの見え方、感じ方が変わったのである。一つの観点を得たために、幸福とは何か、ということが、はつきり見えてくるのである。

筆者はこれを「彼らは解釈的な生を生きている」という言葉で表現している。どういうこつちや？ ここでは、ある観点のもとに色々なできごとを理解して生きていることⅡ解釈的な生、ぐらいいおさえておく。きつと説明が続くはず。

大切なのは、筆者は、「彼らはまあ、そういう生き方（解釈的な生き方）をしていくのだろうが、それはそれでけっこうなことなのかもしれないが、さて、彼らの立っている前提は本当なのか？」という問題提起をしているところである。続きを見ていこう。

② ●青い鳥と共にすごした楽しい幼児期の記憶は、確かな実在性をもつ。なぜなら、それが現在の彼らの生を成り立たせているからだ。たとえ、何らかの別の視点からはそれが虚構だといえるとしても、彼ら自身にとっては、彼ら自身を成り立たせている当のものであるその記憶が虚構であるはずはない。それが虚構であるなら、自分自身の生そのものが、つまり自分自身が、虚構ということになるからだ。解釈学的探求は自分の人生を成り立たせているといま信じられているものの探求である。だから、もし彼らに自己解釈の変更が起るとしても、それは常に記憶の変更と一体化している。

◆2 ここでは、記憶が誤っていることは、この本質からして、ありえないのだ。▽少しむずかしそうになってきたが、あわてないで。「本当に彼らの生は肯定されるべきものなのか」という問題提起を受けていることを忘れないこと。筆者はこれにどういう答えを出そうとしているのか。そう思いながら読んでいくこと。ここは、解釈学的な生き方のありさまを詳しく説明しているところ。

「私たちの生は初めから肯定されるべきものだったんだ」と考えているチルチル・

ミチル兄妹は、「いやいやあんたらは幼児虐待を受けてたんだよ」とだれかにいわれ
ても、自分たちの記憶を虚構だとは信じられない。あの思い出が虚構なら、それに続
く今の私たちもすべてが虚構になってしまう！

「だから」以降がわかりにくいかもしれない。ここで話題になっているのは「自分
の人生を成り立たせている」といま信じられているものを求め、それを根拠にして生
きようとする「解釈学的な生」である。ここでは「自分の人生を成り立たせていると
いま信じられているもの」がなにより大切にされる。例えば、チルチル・ミチル兄妹
がこのあと社会の荒波にもまれたり恋をしたりして、「自分の人生はあのできごとを
乗り越えたことやあの人と出会ったことよって成り立っている」と考え、以前とは
違う「自己解釈（自分つて何、幸福つて何）」にたどりついたとき、記憶のあり方は、
その新しい観点から解釈し直される。新しい観点と矛盾しないように、記憶のほうは
変更されるのである。だから記憶はいつも「自分の人生を成り立たせている」といま信
じられているもの」と矛盾することなく「正しい」。

◆問2 「ここでは」と何をさすか。

「解答例」「解釈学的な生。」「解釈学的な探求。」など。

③ ●だが、外部の視点から見れば、記憶は後から作られたものであり、その記憶に
基づく彼らの人生は虚構でありうる。その鳥はほんとうはもともと青くはなかったの
かもしれない。そして、もともと青くはなかったというまさにその事実こそが、彼ら
の人生に、彼ら自身には気づかれない形で、実は最も決定的な影響を与えているの
かもしれない。もともと青かったという記憶自体が、そして、そう信じ込んで生きる彼
らの生それ自体が、ほんとうは青くなかったというその事実によって作り出されたも
のなのかもしれない。記憶は、真実を彼らの目から隠すための工作にすぎないのかも
しれないからだ。これが、過去に対する系譜学的な視線である。系譜学は、現在の生
を成り立たせていると現在信じられてはいないが、実はそうである過去を明らかにし
ようとする。

▽ここに至って、筆者のいおうとしていることがようやく見えってくる。

「自分の人生を成り立たせている」といま信じられているもの」からすべての記憶を
解釈する（解釈学的な見方）と対立するのが、「自分の人生を成り立たせているとい
ま信じられているもの」は本当なのか、それにもとづいた記憶は本当なのか、と疑い、
いま信じられているものとは違う過去を見ようとするのが、〈系譜学的な視線〉であ
る。筆者は、この、〈系譜学的な視線〉＝見えなくなってしまう過去の過去を見よう
とする視線が存在することがいいたいのである。

段落の前半部分は理解できただろうか。

例えば、彼らは一方で幼児虐待を受けていたとする（鳥は青くなかった、というこ

とだ）。しかし、本当は虐待を受けていたけれど、その真実から目を背け、虐待の合
間合間に気まぐれに与えられていた、幸福な愛情の体験のみを記憶の材料として彼ら
の記憶が作り上げられている可能性——それが指摘されているのである。このとき、
虐待は、彼らの記憶を作り上げる根本的なできごとになっている。

④ ●時間経過というものを素朴なたちで表象すると、いま鳥がたしかに青いと
して、もともと青かったか、ある時点で青く変わったか、どちらかしかないことになる
だろう。それ以外にどんな可能性があるのか？ しかし、「読1」解釈学と系譜学
対立が問題になるような場面では、そういう素朴な見方はもはや成り立たない。も
もと青かったのでもなければ、ある時点で青くなつたのでもなく、ある時点でも
と青かったということになつたという視点を導入することが、系譜学的視点の導入な
のである。それは、鳥がいつから青くなつたかを探求することも、いつから青く見
えるようになったかを探求することも、ない。そういう探求はすべて、解釈学的思
考の枠内にあるからだ。それに対して系譜学は、いつから、どのようにして、鳥がも
ともと青かったということになつたのか、を問う。

▽さてさて、哲学的な言い回しが連続するが、基本的には▼対比に目を向けて、慎重
に〈解釈学〉と〈系譜学〉を区別しよう。「学」という語がついているが、ここでは、
「考え方・見方」という意味に取っておこう。

〈解釈学〉もともと青かった。ある時点で青くなつた。いつから青くなつたのか。い
つから青く見えるようになったのか。

〈系譜学〉（実際のことはともかく）ある時点で「もともと青かつたということにな
つた」。

この違いを理解せよ。

●それ（系譜学）は、これまで区別されていなかった実在と解釈の間に楔を打ち込み、
解釈の成り立ちそのものを問うのであり、記憶の内容として残っていないが、おの
れを内容としては残さなかったその記憶を成立させた当のものではあるような、そう
いう過去を問うのだ。だからそれは、現在の自己を自明の前提として過去を問うので
はなく、現在の自己そのものを疑い、その成り立ちを問うのであり、いまそう問う自
己そのものを疑うがゆえに、それを問うのである。

▽解釈学では、いつから青くなつたのか（実在）と、いつから青く見えるようになった
のか（解釈）、が区別されていない。青い、という信念は、実際にそれが青く、ま
た、そのように見えていることが根拠になっている（これはふつうのことですね）。
しかし、系譜学は、その見方そのものが、いつ、どのようにして生まれてきたのか、
を問う。例えば、虐待の記憶はもう残っていないが、それを隠すために成立した、に
せの（幸福だった過去）という記憶を問い直す。今の自分を成り立たせているあり方

が、そのようなにせの過去を作ったのだから、当然、今の自分のあり方・見方自体が疑われることになる。

⑤ ●だが、「ある時点でもともと青かったという事になった」という表現には、本来共存不可能なはずの二つの時間系列が強引に共存させられている。「もともと青かった」と信じている者は「ある時点で……になった」と信じる者ではありえず、「ある時点で……になった」と信じる者は、もはや「もともと青かった」と信じる者ではない。だから、「ある時点でもともと青かった」という事になった」と信じる者の意識は、解釈学的意識と系譜学的意識の間に引き裂かれている。統合が可能だとすれば、それは◆3系譜学的認識の解釈学化によってしかなされない。系譜学的探求が、新たに納得のいく自己解釈を作り出したとき、そのとき系譜学は解釈学に転じる。青くない鳥とともにすごした、チルチルとミチルの悲しい幼児期の記憶は、確かな実在性をもつにいたる。

▽系譜学の落とし穴。終わりの二文がわかりやすい。▼わかりにくいときは比較的わかりやすいところから押さえよ。▼具体例によって理解せよ。

「実は彼らは虐待という悲しい幼児期を過ごしたのだ」という認識が、系譜学的な探求によって得られたとする。そして、それが一つの新たな自己解釈となったとき、その認識が、今の自分を成り立たせる新たな信念となる。これって、また、解釈学になつてるんじゃないの？ そのとおり、系譜学のつもりが、いつのまにか解釈学になつていたというわけだ。

◆問3 「系譜学的認識の解釈学化」とはどのようなことか。

直後の表現を使うのが無難。自分のことばで言えたら、そりゃもつといいだろうが。

「解答例」「系譜学的探求が、新たに納得のいく自己解釈を作り出したとき、系譜学が解釈学に転じること。」

⑥ ●それなら、けっして解釈学に転じないような、過去への視線はありえないのだろうか？ 他人たちがただ私のためにだけ存在しているのではないように、過去もまた、ただ現在のためにだけ存在しているのではない。過去は、本来、われわれがそこから何かを学ぶために存在したのではないはずだ。それは、現在との関係ぬきに、それ自体として、存在したはずではないか？ 過去を考えるとき、われわれは記憶とか歴史といった概念に頼らざるをえないが、ほんとうはそういう概念こそが、◆4過去の過去性を殺しているのではないか？

▽再び問題提起。解釈学のイメージはだんだんはつきりしてきたと思う。解釈学的な視線というのは、今の都合で、過去を解釈する、というものである。系譜学はそれを批判的に見るものであったが、その系譜学ですら、そこで得られた見方で、都合よく

過去を（再解釈）してしまうおそれがある。ここで問い直されているのは、そういう現在の都合に合わせた解釈に汚されることのない過去ってありえないの？という問いかけである。

◆問4 「過去の過去性」とはどのようなことか。

哲学らしい表現だが、同じ段落内から、同意の表現を探せばいい。（現在を中心とした）記憶や歴史という概念が○を殺している。殺してはならないはずの○を殺している。本当は現在の都合によって殺されてはならない○とは？ 「過去の過去性」は「過去は過去だ」といつているのと同じですね。

「解答例」「現在との関係ぬきに、それ自体として、存在した過去。」

「現在との関係ぬきに、それ自体として、過去が存在したこと。」でも可。

⑦ ●だから、記憶されない過去、歴史とならない過去が、考えられねばならない。このとき、考古学的な視点が必要となるのである。

▽新たな概念登場。「考古学的な視点」。その内容は？

⑧ ●そのとき、鳥がもともと青かったか、ある時点で青く変わったか、という単純な時間系列が拒否されるだけではなく、どの時点でもともと青かったことにされたのか、という複合的時間系列もまた、拒否されねばならない。いま存在している視点がいつどのような事情のもとで作られたかという視点から過去を見る視線そのものが、つまり、過去がいま存在している視点との関係のなかで問題にされることそのものが、否定されねばならない。

▽ここまでの議論から、「考古学的な視点」は、当然、解釈学的十系譜学的視線の両方を否定するものとなる。現在の都合で過去を見ることすべて否定されることになる。

⑨ ●そうなればもはや、鳥はある時点でもともと青かったことにされたとはいえず、ほんとうはもともと青くはなかった、などとはいえない。もともとというなら、鳥は青くも青くなくもなかった。そんな視点はもともとはなかったのだ。そういうことを問題にする視点そのものがなかった。

▽「鳥はある時点でもともと青かったことにされたとはいえず、ほんとうはもともと青くはなかった」というのは系譜学的な見方だが、「考古学的な視点」では、「青い／青くない（幸か／不幸か）」といった視点そのものを設定しない。

●だがもはや、それがあある時点で作られたという意味での過去が問題なのではない。ただそんな視点がなかったことだけが問題なのだ。ほんとうは幸福であったか不幸で

あったか（あるいは中間であったか）といった問題視点そのものがなかった、彼らはそんな生を生きてはいなかった。鳥はいたが色が意識されたことは一度もなく、したがって当時は色はなかったというべきなのである。

▽では、もともとは「幸／不幸」という観点はなかったが、ある時点でそういう観点が作られた、ということが問題なのか。いや、「考古学的な視点」では、それらもはや問題ではない。端的に、「幸／不幸」という観点はなかった、というだけなのである。

●色がなかったとは、もちろん、無色透明（色概念の内でのその欠如）という意味ではなく、色概念の外にあるという意味である。

▽注釈的な内容。幸不幸の例でいうと、幸か不幸かという概念の中で、それがどちらでもない、という意味ではない、といっているのである。そもそもそんな概念の外側にあるべきことだった、という見方が示されているのである。

これは、教科書の見田宗介「南の貧困」の考え方に似ている。バーマヤオ族が貧困ではない、というのは、（所得による）貧困概念の中で所得が欠如していない、という意味ではなく、そもそも彼らはそんな貧困概念の外側で生きている、という意味であった。

●【読2】このとき、時間系列は複線化されるのではなく無限化される。考古学的事実は、現在との間に、掘り起こされるべき意味上のつながりをもたず、たとえ掘り起こされても、それは意味連関の欠けた単なるエピソード（個的事実）としてしか理解されない。いつか連関が設定され、◆5考古学が解釈学に変わるかもしれないが、それをいま予想することはできないのだ。

▽読解問題2は後から考える。

◆問5 「考古学が解釈学に変わる」とはどのようなことか。

それぞれを整理して、一つの文にする。

考古学的事実Ⅱ現在と意味上の関係を持たない、個々の事実。

解釈学Ⅱ現在と過去を関係づけること。

「解答例」Ⅱ現在と意味上の関係を持たない個々の事実が、現在と関係づけられるようになること。」

⑩ ● 自己も現在も、ただそれがたまたま自己であり現在であるという事実以外に、何の意味もない。それゆえ、過去は現在を意味づけるためにはない。過去を救済するとは、どのような仕方であれ、それらをわれわれの解釈学の内部に包み込むことではない。末永くわれわれの記憶に残る人たちが救われたのではなく、むしろ末永くわれわれの記憶に残そうとするわれわれの意志こそが、彼らを決定的に殺そうと

する意志なのである。他者はただ無関係に存在するものとされることよってのみ救われるように、過去はただ忘却され、現在と決定的に隔てられることよってのみ救済されるのである。だから、【読3】考古学的視線とは、視線を向けることができな

いものに対する、不可能な視線の別名なのである。

▽筆者の主張のまとめ。自分の都合で意味づけるな。これが主張の中心である。「救う」という言葉が使われているが、主張には、この言葉に対する通常の考え方に對する批判が含まれている。

過去を救う、救い出す、というとき、通常それは「忘れない」ことを意味する。筆者は、過去を記憶にとどめようとする意志は、過去を「殺そうとする」意志だ、という。

「他者はただ無関係に存在するものとされることよってのみ救われる」ということの意味は詳しく説明されていないが、自己も、他者も、現在も、過去も、他と無関係に単に存在している、という考えが筆者の根本にある。そして、それはよくないことではなく、そうでしか、「救われぬ」と筆者は考える。むしろ、他と関係づけ、さまざまな解釈を施されることは、その端的な存在を、「殺して」しまうことになる。「過去はただ忘却され、現在と決定的に隔てられることよってのみ救済される」という筆者は、現在による過去の利用を完全に否定しているように思われる。

■読解問題1「解釈学と系譜学の対立」とあるが、「解釈学」と「系譜学」とは、それぞれどのような考えか、本文中の語句を用いて説明しなさい。

☆意味段落の利用。①②が解釈学、③④が系譜学について書かれた段落であることを見通して、そこから言葉を探す。とくに▼定義文になっている箇所注目。

②「解釈学的探求は自分の人生を成り立たせているといま信じられているものの探求である。」

③「系譜学は、現在の生を成り立たせていると現在信じられてはいないが、実はそうである過去を明らかにしようとする。」

これを軸として書いていく。注意すべきなのは、両者の対比がきれいに明らかになるように書くことである。

「解答例」Ⅱ「解釈学は、現在の生を成り立たせていると現在信じられているものを前提として過去を考える。系譜学は、現在の生を成り立たせていると現在信じられているものを自明の前提とせず、それがいつからどのように自明となったのかを明らかにしようとする。」（115字）

■読解問題2「このとき、時間系列は複線化されるのではなく無限化される」とはどのようなことか、説明しなさい。

時間系列うんぬんという議論がわかりにくいだろう。整理してみよう。

④「時間経過というものを素朴な私たちで表象すると、いま鳥がたしかに青いとして、

もともと青かったか、ある時点で青く変わったか、どちらかしかないことになるだろう。」
この時間系列では、「今、鳥は青い」という事実に対して、もともと青い、か、ある時点から青い、のどちらかの可能性を考える。

A 青い鳥 ↓青い鳥

B 青くない鳥 ↓青い鳥 ↓青い鳥

解釈学的な見方では、Aのように考える。では、系譜学的な見方とはどのようなものだったか。

⑤ 「だが、「ある時点でもともと青かった」ということになった」という表現には、本来共存不可能なはずの二つの時間系列が強引に共存させられている。「もともと青かった」と信じている者は「ある時点で……になった」と信じる者ではありえず、「ある時点で……になった」と信じる者は、もはや「もともと青かった」と信じる者ではない。」

「ある時点でもともと青かった」と考える時間系列とは、どんなものだろうか。

C 青くない鳥 ↓「青い鳥」 ↓青い鳥 ↓青い鳥

これが系譜学的な見方だった。ここには、AとBの両方が含まれている。さかのぼっていった出発点を「青かった」と取る(A)視点と「青くなかった」と取る(B)視点である。これは書き方を変えれば、

A 青い鳥 ↓青い鳥

B 青くない鳥 ↓青い鳥 ↓青い鳥

の二つが同時に存在しているという意味で「複線化」した視線といえる。

では、「このとき、時間系列は複線化されるのではなく無限化される」とはどういうことなのか。「このとき」とは、どういうときか。

⑨ 「鳥はいたが色が意識されたことは一度もなく、したがって当時は色はなかった」という「考古学的視点」を取ったときである。これはどう図示されるのだろうか。

D 鳥 (現在)

これは、「鳥がいた」という個的事実が、現在と何の関係もなくそこにあるだけだ、ということを表している。個的事実は、青いかどうかといった、現在からの意味づけの視線を失い、ただ無数にそこに存在するだけのものとなる。現在にとつて意味のあるものだけが存在するというのではなく、端的にすべてが平等に存在する。

「このとき」のいいかえは、問4の答え「現在との関係ぬきに、それ自体として、過去が存在したこと」と⑧段落を利用するといひ。⑧では、考古学的視点では「鳥がもともと青かったか、ある時点で青く変わったか、という単純な時間系列が拒否される」「どの時点でもともと青かったこと」にされたのか、という複合的時間系列もまた、拒否される」といっている。そして、「いま存在している視点が、いつ、どのような事情のもとで作られたかという観点から過去を見る視線そのもの」「過去をいま存在している視点との関係のなかで問題にすることそのもの」を否定しなければならぬ。

といっている。これを、ひっくり返していうと、問4の表現になる。

「過去を現在の視点との関係で問題にすることを否定し、現在との関係ぬきに、それ自体として、過去が存在したとき」といった言い方ができる。

いいにくいのは、「無限化される」の部分だ。無限化の端的ないかえは見つからない。ただ、実質的には、⑧にあるように、時間系列自体が否定されること、を意味している。「無限」のニュアンスを無理に表現しようとする間違ったことを書いてしまう恐れがあるので、確実なところで押さえておくのが賢明だ。

「解答例」「過去を現在の視点との関係で問題にすることを否定し、現在との関係ぬきに、それ自体として、過去が存在したとき、時間系列自体が否定される」ということ。(75字)

■読解問題3 「考古学的視線とは、視線を向けることができないものに対する、可能な視線の別名なのである」とはどのようなことか、説明しなさい。

題意を捉えよう。「考古学的視線とは……不可能な視線だ」というのは、いかにも妙な定義である。不可能なら視線といえないじゃないか、と思いませんか？ 題意は、ここにある。考古学的視線といったけど、この視線はほんとは、ふつうの視線ではあり得ないんです。どうして、視線とはいえないのか、説明して！というのが出題意図。

⑩の表現を利用するといひ。傍線部の文は「だから」で始まるので、この直前の文も含めて言い換えていくといひ。

「解答例」「考古学的視線は、過去を現在の視点との関係で問題にすることを否定し、ただ忘却するだけである。したがって、考古学的視線では過去とつながりを持つことが不可能である」ということをいっている。(90字)

■論述への挑戦

過去をどう捉えるかというのは、きわめて難しい問題である。かつて神戸大学で、ナチスの絶滅収容所の問題をどう捉えるべきかを論じた文章が出題されたことがある(二〇〇五年)。なにしろ、そこは絶滅収容所であり、へたれも生きて帰っては来なかった場所なのである。では、そこで起きたはずの出来事は、証拠がないので、あったとはいえない、なかったのだ、といえるのだろうか。現在の視点から自由に客観的に過去を見るといふことなど原理的に可能なのだろうか、という疑問も湧く。

問。色々な歴史的事実について、意見が対立することがある。特に、現在の利害や信条の対立が絡んでいるときには、その対立が激しくなる。何か一つ、そのような論争の実例をあげて、どのように考えるべきか、考えを述べなさい。八百字以内。